

メンバー

大塚賢一 46才  
 木倉 博 39才  
 福迫順一 38才  
 田代恵子 36才  
 安田豊太郎 32才  
 小西雅美 30才

# Mountaineering Ski

天候  
 晴れ  
 吹雪

Vol.7 2001. 4/14-15 御嶽山

紀行文  
 大塚賢一  
 木倉 博  
 田代恵子

写真&編集  
 大塚賢一

山頂手前の避難小屋 2945 mまでなんとかたどり着いたもののその先へ行くにはあまりにも危険すぎる。

みんなの顔も不安が隠せない。『下山！』の言葉でいくらかホッとしたようだが気象条件は全然によくならない。特に小西嬢は体に寒気が入り震えが止まらなくなっている。「心配するな！、オレが必ず無事降ろしてやるから」と勇気づけるが・・・。

みんなのスキーの技量は分かっているので、スキー組を木倉・福迫・田代、ピッケル・アイゼン組を私・安田・小西とパーティーを2組に分けた。

スキー組は「必ずワンターンで止まり離れないように！、各自笛を口にくわえとけっ！」と激を飛ばす。

距離にして250m程だが視界10m程のガス中での緊張感一杯の時間であった。



2700 m付近から視界も幾分かましになり、斜度も40度以下になり装備変更で我々もスキーをつけることにするが、ヤッさんがアイゼンを外したとたんにザック共々1mほどの滑落劇、とっさに私の手が出て捕まえていた。「アイゼンを付けているときに必ずピッケルとアイゼンでザックの確保、自分の確保を作っておくように！」と言った矢先だった。ほんの少しの油断がとんでもないことになるところである。

雪面はまだまだアイスバーン状態であるがそれぞれが距離を開けずに、ガリガリガリ・・・、ザザザザ～ッ、と雪面に金属音を響かせながらの滑降で無事にスキー場までたどり着いた。

「ビビんなよっ！、雪面歩行訓練を思い出せっ！、ブレードは前にスピツェを突き刺してっ！、足は力カトから力強くアイゼンを効かしてっ！」斜度45度以上のカチカチの下山を強いられる。  
 午後から気圧の谷が通過してアツという間に悪天になり、強風、ガス、冷気：：今まで緩みがちだった雪面がアツという間にクラストしてガチガチのアイスバーン状態になった。

今までのトレーニングの成果をだす3000峰への登り、そして大滑降の日がやってきた。

真っ青の空の下で真っ白のベールに身をまとい天高くそびえる御嶽山、それを見ると道中の6時間の疲れもどこへやらである。

ゴンドラ終了地点でシール装着しアオモリトドマツの中へと姿を消して行く。今日の天候は午後から気圧の谷が通過するらしいが今この時点ではみじんにも感じられなかった。

いきなりの2150m地点からの登りは酸素も希薄になっていて脳が順応できていない。人並み以上に体力はあるもののゆっくりとシール歩きをしているのに「ハアハア、ゼイゼイ」と心拍数がかかり上がっていて、「なんでこんなに息切れしてしんどいの？」と山スキー1年生にはいささかとまどいを隠せない様子である。

アオモリトドマツ、ダケカンバのティンバーラインに達する頃、後方には青空に浮かぶ中央アルプス連峰、右方には乗鞍岳、その向こうに穂高連峰・・・、壮大な山並みが見渡せるが、まだまだ冬の形相で真っ白である。このGWにはお世話になりに行くからな～と声をかける。



山頂目指してシール登行

ハエマツ帯で純白のライチョウと話しをして、クラスト気味になってきた雪面でクトーを装着しているとき、先行パーティー10人ほどの山スキーヤーが30度ぐらいの斜面で次々と滑落劇を見せてくれた。

何故あんな所を直登しているのか？、また何故ジグを切って登らないのか？、不思議であった。1人が大幅に滑落したので落としたストックを拾ってやって近づく、私のピックストックを見て驚いていた。そして、ピッケル・アイゼンに装備変更したらいい、とアドバイスをする

がなんとそれすら持っていない、また何が入っているのかペシャンコのディパックのみであった。彼女は相当に恐かったらしく涙声で動揺を隠

せない、そこへパーティーのリーダーが来たので私もそれ以上何も言わなかったのだが・・・、結局そのパーティーはその時点から引き返してしまった。いくらグレンデの延長かもしれないが3000m峰をなめるなよっ！と心につぶやいていた。

そうこうしているうちに風も強まってきた、鉛色の空になってくる。また小西嬢が大幅に遅れだした・・・無理もない、あんな滑落劇を目の当たりに見たものだから慎重になるのも当然であろう、また彼女と福ちゃんはピックストックじゃないのだから不安はかさむばかりである。



フル装備に身をまとってダケカンバ帯を滑降

他の4人はピクストックを持っているだけでとても心強い、私も2度片足が滑ったがピクひと突きで初期停止・・・なんとも心強い味方である。

小西・福迫は早々にピッケル・アイゼンに装備変更させた。

だんだん風が強まり雪煙が立ちこめはじめてくる。体に寒気が入らないうちにカップを着込む装備変更。

しかし、ヤッさんはカップはザックの一番下に入れているのもたついてしまう。「ザックから出した荷物を突風で飛ばされないように注意して!」。なんでまた一番下に入れとんねん?、シール・アイゼン・カップ・行動食は一番上にパッキングするように・・・。

天候はますます悪化して強風に幾度も耐風姿勢をとりながらなんとか風をしのげる避難小屋へとクローを効かせながら、「絶対に滑落するなよ～っ、一步一步確実に、ピクは雪面に向けとけよ～っ」と強風の中を大声が飛ぶ。

下山後小雨降る中、大型ドームテントを張り早速に楽しい晚餐会となりみんなの顔もほころんくる、今日は今までのトレーニングが凝縮された一日であったなあと、無事の下山を御嶽山にキャンピングする。



急斜面での切り返し



ホワイトアウトでの下山

今の今までであった出来事がウソのように外を見上げればダイヤモンドを散りばめたような美しい星空に変わっていた。

明るく日は言うまでもなくドピーカン日和りであったが体もほどよく疲れているので来年に期待を託しゆっくりと帰路についた。

#### 各自の反省点と良点

・福迫・・・登りでは小西に対して完璧なサポートであったが、下山地点では寒気と悪天のせいで判断力が鈍り、装備変更をじゃまくさげらず最後までサポート出来るようにしてほしいものです。

・木倉・・・下山地点からの滑降はまだまだ危なっかしい滑りなのでちゅうちょせずにピッケル・アイゼンに装備変更してほしいものです。

・小西・・・トレーニングしたものが一度におそってきて少々パニックになっていたが1年生としては上々です。

・田代・・・さすがにスキーキャリアが豊富なだけに悪条件下でもバランスのとれた滑りはさすがです、またクローを付けての急斜面での切り返しも決まっていた。

・安田・・・アイゼンを装着した時の自信たっぷりの歩行は感心です。また樹林帯滑降では一番にうまかったです。装備変更がもう少し早くなれば申し分なしです。

これからもステップアップして次なるGWの Central Alps、Northern Alps につなげていきましょう。

### 田代恵子の御嶽山山スキー

4月も半ばと言うのに・・・たくさんのスキー客にビックリ！スキー人口も減っているのに、やっぱり、好きな人は好きなんだ！となんだか嬉しくなりました。そして、山スキーヤーの多さにもビックリです。関西では、出会ったこともなかったのに、いくつものパーティがいました。やっぱり本場なんですね。

私たちはゴンドラの終点から登り始めました。なんだか手足がだるくて、進みません。どんどんみんなから離れてしまいます。数歩行っただけで立ち止まって・・・“ やっぱ私は遅いなー。トレーニングしなきゃ！” とやや落ち込んでいました。が、福ちゃんも少し行ってはハーハー休憩しているので、ちょっと安心。みんなだって、しんどいんだ！、息苦しい気がする・・・空気が薄いのかなー？。私の遅れはビデオタイムに救われました。

少し行くと8合目の金剛堂が見えてきました。山頂も見えます。“ なんだ、すぐじゃん。” と思いましたが、それがそうではないらしい



ライチョウ

んです・・・。  
ハエマツのなかに、2羽の真っ白な雷鳥を見つけました。私は、有名お菓子“雷鳥の里”の写真からグレーだと思っていたのですが・・・。雷鳥にゆっくり近づいてみましたが、逃げません。かわいいです！

斜度が出てきました。クトーをつけるように！との指示が。“ わーい、わーい、初クトーだ！ザクツザクツと気持ちいい” と思っていたのもつかの間、先行するパーティの人たちが相次いで数十メートルも滑落していきます。どうも止まらないようです。こりゃ、こけちゃダメだなーと気合いが入ります。



滑 降

斜度がうーんときつくなりました。スキー滑走面のすべてを雪面につけるように気をつけて、一步一步登っていたのに、もう、それでは登れなくなってしまいました。“ どうしよう！ずり落ちる。こんな所ではアイゼンに履き替えることもできない・・・” と、ちょっとパニックになりかけましたが、硬い雪なので、クトーだけで登れることがわかり、そこからは一転、角度に気をつけながら、一心にカニさん登りで登りました。あー怖かった。

上に行くほど風が強くなり、急斜面にいると言うのに、何度も押されるぐらいの強風に見舞われ、思わず、ピッケルストックを突きたてての耐風姿勢です。めちゃ高かったピッケルストックでしたが、その威力・必要性をひしひしと感じたひと時でした。そんな、そんな必死な私を上からビデオで撮っている人がいました！！誰でしょう。

今まで、いいお天気で、遠くの山々まで見えていたのに、風に吹かれると急に寒くなり、凍傷になるのでは・・・と思えるぐらいに手も冷たくなりました。そして、あっという間にガスってしまって、ほんの先も見えなくなってしまいました。山の天気は怖いものです。見えないと言うのは不安なもので、山頂まで行く気力も失ってしまい、あと少しというところまでできていたのに、下山することになりました。

新雪とクラストが入りまじった、滑りにくい雪。おまけに、こけてはいけない！と言うプレッシャーつきの滑降です。ルンルン滑れるはずだったのにー。あのきくちゃんが、怖がってしまい、横滑りしかできない状態でした。そして、ガスのため、2・3ターンもすると皆が見えない状態になるので、1ターンづつゆっくりと降りました。

少し下るとガスもなくなり、ハエマツの横、ダケカンバの間をぬって滑り、樹林帯にも突入。ポーゲンの足がバンバンになってしまいました。大塚さん、安田君は樹林帯が上手い。あの人たちは何かが違う！私のような、やわなゲレンデスキーヤーとは何かが違うぞ！と、あっという間に下まで降りてきました。

ルンルン滑降や山頂は踏めなかったけれども、緊張感のある登り下りができて、これはこれで、とってもいい経験になりました。

この日の夜、ご褒美だったのか、満点の星空、しかも、星に手が届きそうな程の低い、美しい空に大大大感激でした。

キックターンしようとした時、強風が！。足を開いたまま詰めつきス



風雪に耐える

トックの詰めを斜面に突き刺して体を丸くしてしのぐ！。

大塚さんに言わせればこんな風くらい、と言われそうだが、場所が場所だしおさまらないと後が大変危険だ！。小西ちゃんもヤッさんも初めてだし、少しおさまり、蟹登り、しかしまた来た！。

小雪が手袋につく、手が冷たい、息をかける、みんなは大丈夫か？。恵ちゃんもヤッさんも丸くなっている。後少しで小屋が有る、あそこまで頑張らねば・・・。

シールがはがれはじめている、クトーだけでこのきつい斜面にいる。3度目の強風が来た！なかなか止まない。このまま強くなるとどうなるのか？。

大塚さんが小屋に着く、「ここまで来て板をはずせ！」クトー落とすなよ！」次に私が着く、そして恵ちゃんヤッさんが着き、先にアイゼンで上がっていた福さんと小西ちゃんみんな小屋に着く、小西ちゃんと福さんが小屋の周りの氷着いた雪をピッケルで取ろうとしたが開かない。

着る物を着込んでここから下山！小西ちゃんとヤッさんと大塚さんが

アイゼンで、私と福さんと恵ちゃんがスキーで下る！一步一步慎重に大塚隊長の後ろを2人がアイゼンで、福さんと恵ちゃんが、ワンターンして下りる、私はここを回さずにキックターンで行くが転ぶ、ストックのツメで押さえて板を履き、横滑りで下る。

200 m程下り、ここらで私も回して滑る、アイゼンの三人も板をはく、大塚さんが「ヤッさんアイゼン外したら滑るから気をつけるよ！」と声をかけたとたんヤッさん滑落！。とっさに大塚さんの手が出てヤッさんをわしづかみ(なんちゅうパワーや)。そしてガスの中、少しずつ滑りました。

登りで順調にシール登行していて、クトー装着し登りはじめた時、人が転げ落ちてるのが見えた！滑落停止訓練だと思って見ていたら「滑落や！！」と大塚リーダー、よく見るとスキーを履いている、ほんとに滑落だ！しかも次々と何人もが滑落、クトーをつけていないのか？先行の大塚さんが滑落した1人に指導し始めた。やがてそのメンバーのリーダーが来てダメを思ったのか全員ここから引き返した。

小西ちゃんが遅れ始めたため、大塚リーダーが小西ちゃんにアイゼン・ピッケルで福迫さんがサポートして登るように指示、安田君、田代さんはこのまま私と登った。

時おりクトーも滑り、ストックのツメで止めることも何度も。鍛えられたメンバーだ！。私は、みんなのクトーより1センチツメが長いめほとんど滑らない、やがて斜面もきつくなり、キックターンで登る。



ホワイトアウトを滑降

思えば3年前の私は、加藤氏から「お前のシールは危ない！アイゼンで板は引っ張り！」と言われ、ここを登った。安田、田代両氏は始めてと言うのにたいしたもんだ！。

小屋に着く、ここでカッパを着る、風が出てきて体が冷える、ヤッさんはここでカッパが一番下に入ってたため、ザックの物をみんな出す、「カッパはいつ使うか分らんから一番上に入れとけ」と大塚リーダー、確かにこうした時間のロスが命を落とす事も有る、良い教訓になったろう、こうして私たちはあの強風の中、山頂手前の

小屋まで登ったのである。

ガスの中でクラストした悪雪を下った。あっという間に樹林帯手前まで来る。ガスも取れてゲレンデまで見える、3年前板と靴が埋もれる程緩んだ腐れ雪とは違い、今回は硬い！しかし板が走る分コントロールとルートハンティングが難しい、先行するリーダーのあとをヤッさんがボーゲンでたくみに着いて行く、うまいもんだ、私と言えば型にとらわれ、木に激突！ザックは引っかかり、後頭部から転びの連続でした。しかしみんな順調にゲレンデに着いた。小雪の舞う中、思い思いにゲレンデを滑り、この御岳山スキーのフィナーレとなった。

御岳に乾杯をし、テント内で酔いつぶれているうちに空には満点の星が輝いていた。

御嶽山よ、ありがとう！